

大阪・関西万博に期待すること・実現したいこと

平成31年2月
株式会社ハビテック
研究所長 石川善樹

1. 総論（課題意識）

- 日本は、「世界の多くの国がほしがるといふものほとんど全てがある長寿国」を実現した。SDGsに掲げられている事柄についても、多くの国の立場から見れば、日本はすでに達成していると言えよう。
- しかしながら、経済大国、技術立国、長寿国となってきた過程で、人々の「いのち」が「輝く」※ 社会が実現されてきたとは断言しにくく、言うなれば「いのち」の「灯が消えないように紡ぐ」社会が実現された程度ではないか。（※いわゆる Well-being、幸福といった概念に近いものを想定している。）
- これは、世界の多くの国ひいては人類が将来的に直面する課題にほかならない。すなわち、今日日においては世界各国で技術革新や社会システムの改変が叫ばれているものの、遠からず、資本主義の地平で「いのち」の「輝き方」を見据えて舵を切る必要が出てくる、否、人類がその重要性を強く認識するに至るのではないか。大袈裟でなく、2030年を目処としたSDGsに続く理念的支柱が置かれ得る主題として、大阪・関西万博のテーマ、サブテーマ、及びコンセプトは、大きな可能性と重要性を有するものと理解している。
- 大阪・関西万博とその開催に先立っての社会的・国際的議論においては、技術も社会システムも全ての人の「いのち」が「輝く」ための、そして、そのような「未来社会」が実現されるための過程・手段であるということはいま一度再確認したい。その上で、「いのち」が「輝く」ということの意味を世界各国とともに考え、再定義していく契機としていきたい。

2. 議論のフレーム（提案）

政府内外において、下記の3つのフェーズで議論を整理した上で、大阪・関西万博においてこれらを包括的に提示することにはどうか。

<フェーズ1> 人類のあゆみと「いのち」

技術革新・社会システム整備の歴史が、人々の「いのち」にどのような影響を与えてきたか（Well-being、幸福に寄与し続けてきたか）を再検討する。

<フェーズ2> 「いのち」が「輝く」ということ

上記フェーズ1を踏まえ、「いのち」が「輝く」とはどのようなことなのかを、多くの国や文化に理解・受容されやすい粒度にまで言語化（定義）するとともに、その測定の指標・方法について、具体的なイメージを固める。

<フェーズ3> 「未来社会」を「デザイン」する

上記フェーズ2を踏まえ、「いのち」が「輝く」ために、そして、そのような「未来社会」をデザインするために、技術や社会保障制度等の社会システムの活用・実装のされ方について、仮説を立てる（大阪・関西万博で提示。）。